

祝祭日には国旗を掲げましょう



しろたへ

安房神社々報
第十二号

安房神社が現在の地に御遷座されてより、千三百年の節目を迎えます。

神武天皇の御代に肥沃な土地を求めべく勅命を受けた天富命は、建材、布、祭具など様々な物造りの集団であった忌部一族を率いて房総の地に上陸されました。上陸地点は今の御鎮座地より二キロメートルほど離れた布良の海岸で、そこに今も残る男神山に天富命の祖父様であると伝えられる天太玉命を、女神山にそのお后神の天比理刀咩命をお祀りしたのが安房神社の始まりであると云われています。そして、天富命はこの地を荒らしていた獣たちを駆除します。

その御神徳に感謝し今も継承されている祭典が神狩神事であり、安房神社、下立松原神社、洲宮神社で齋行されています。

安房神社近辺ではここ数年猪による被害が急速に拡大し、ときには人が傷を負わされています。平地が舗装された現在に於いても深刻な被害が起こりうるのですから、より未開の古代だと人々の受ける獣害は尚更だったと思われる。

その後、天富命は様々な殖産をこの地に根付かせます。特に成功したのが麻であり、千葉県の名産である上総、下総の総は『ふさ』であり、これは麻の古語に由来します。

そして、時代を経て七十八年に上総国内の安房、平群、朝夷、長狭を合併する形で安房国が編成されます。ちょうどこの頃千三百年ほど前に安房神社は今の地に御遷座されるわけですが、この時代、日本の念願だった律令制度をはじめとする国家としての体制が整いつつあり、七〇一年には日本初の本格的な律令である大宝律令が制定され、七十二年に「古事記」、七二〇年に「日本書記」が編纂され、七〇一年には平城京遷都が開始されています。

地域発生の氏神ではなく、国家による祭祀の意味合いの強かったであろう安房神社の御遷座は、そういった時代の動きとなんらかの連動があったと考えるほうが自然であると思えます。

神社は神の座す崇拜の場であるとともに、古代より繋がってきた歴史の生き証人としての役割も持っているのです。

《執り行われた主な祭典》

九月 十四日	午後三時	抜穂祭
九月十七・十八日	午前十時半	安房國司祭
九月 二十七日	午前九時半	琴平社祭
十月十日	午前九時半	館砲三期会慰霊祭
十一月二十三日	午前九時	新嘗祭
十一月二十四日	午前十時半	新穀感謝祭
十二月二十六日	午前九時半	神狩祭
十二月三十一日	午後十一時半	大祓式・除夜祭
一月 一日	午前零時	歳旦祭
一月 四日	午後四時半	有明祭
一月十四日	午後四時半	置炭神事
一月十五日	午前九時	粥占神事
二月 三日	午前十時半	節分祭
二月十一日	午前九時	建国祭
二月十七日	午前九時半	祈年祭
四月 三日	午前九時半	神武天皇遥拜式
四月 三日	午前十時半	桜花祭
※毎月一日	午前九時半	月次祭

男神山・女神山

房総開拓神と崇められる天富命が忌部一族を率いて上陸された布良の浜にあります
二峰の山です。
天富命は男神山に御祖父の天太玉命、女神山にお后神の天比理刀咩命をお祀りされ
ました。これが安房神社の始まりです。

史跡としては何も残っていませんが、太古の人々が仰ぎ見たときと変わらぬお姿で
寄り添う二つのお山を通じ、今もその信仰の想いに共感する事が出来ます。

また男神山は近年まで布良の灯台のあるお山として長い間、航海の安全を守り続け
て来ました。



天太玉命と置炭神事、粥占神事

安房神社の主祭神の天太玉命は産業総祖神として崇敬を集めていますが祭祀を
司り占いにも長じると伝えられています。

安房神社には占いと関係の深い置炭神事、粥占神事という二つの神事がありま
す。

一月十四日の夕刻、正月に用いた門松の松材に忌火を付け、粥を炊き、薪が燃
え尽きる頃、おき赤くおこった炭火を十二本取り出して、その燃えた色具合によ
って一年間の天候を占定するのが置炭神事です。置炭神事するとき、粥を煮た鍋に
十二本の葦筒を沈め、翌十五日の朝に取り出し、小刀で葦筒を割り、その粥の入
り具合によってその年の農作物の豊凶を占定するのが粥占神事です。いずれも一
般参拝者が拝観する事を禁じている当社の秘儀の神事です。

【平成二十九年 置炭・粥占神事 ト定表】

一月 十四日	夕刻	置炭神事	一月十五日	早旦	粥占神事
二月	晴上旬少々雨	中早稲	七分		
三月	晴下旬少々雨	中稲	七分半		
四月	晴上下旬少々雨	中晚稲	五分		
五月	雨上下旬少々晴	晚稲	七分半		
六月	晴上旬少々雨	大麦	八分		
七月	晴下旬雨	大豆	九分		
八月	雨上下旬晴	粟	八分		
九月	晴	小豆 大豆	九分		
十月	晴	粟 大豆	九分		
十一月	晴下旬雨	芋	八分半		
十二月	晴下旬雨	本俵	九分		

安房神社々務所

平成 29 年 厄年一覽

	前 厄	本 厄	後 厄
男	25 歳	平成 6 年生 (戌年)	平成 4 年生 (申年)
	42 歳	昭和 52 年生 (巳年)	昭和 50 年生 (卯年)
	61 歳		昭和 32 年生 (酉年)
女	19 歳	平成 12 年生 (辰年)	平成 10 年生 (寅年)
	33 歳	昭和 61 年生 (寅年)	昭和 59 年生 (子年)
	37 歳	昭和 57 年生 (戌年)	昭和 55 年生 (申年)
	61 歳		昭和 32 年生 (酉年)

※表の年齢は全て数え年になります。

《今後の主な祭典予定》

五月 上旬	午後二時	御田植祭
五月 十日	午前九時半	下の宮祭
五月二十七日	午前九時半	海軍落下傘部隊慰霊祭
六月 十日	午前九時半	厳島社祭
六月三十日	午後四時半	夏越の大祓式
七月 十日	午前八時	忌部塚祭
八月 十日	午前十時	例祭
九月 十日	午前九時半	御仮屋祭
九月 中旬	午前十時半	安房國司祭
九月二十七日	午前九時半	琴平社祭
九月 中旬	午後三時	抜穂祭
※毎月一日	午前九時半	月次祭

神社豆知識

「神前結婚式について」

昨今の神社ブームと相俟って、日本古来の伝統的な神前結婚式の良さが改めて見直され、静かな人気となっているようです。日本での結婚の始まりは神話にあるように、神々から国づくりの命を受けたイザナギ、イザナミ二柱の神様が夫婦となって、日本の国土を築き、多くの神々を生んだことが始まりです。平安時代になると公家の作法であった式で、人と人を結ぶ時に酒盃を交わす慣習の三献に則った、三三九度の酒盃が行われるようになりました。その後、家を重んじた武士の時代になると、家の床の間のあるお座敷で御神号掛け軸の前にお供え物をして、御神酒で酒盃を交わす結婚式が行われるようになりました。この場合は式というよりも、むしろ結婚披露という意味合いが強く、この披露を済ませた後に神社に奉告していただくようです。こうして、神々を祀る床の間を中心とした結婚の儀式は公家、大名、武士、庶民へと広く普及しました。そして、現代の結婚式の形が一般化したのは、明治三十三年五月十日、当時皇太子であられた大正天皇と九条節子妃（貞明皇后）が、宮中の賢所で「御成婚の礼」を行い、このことが世間の注目を集め、今日のような神前結婚式となりました。

安房あづち茶屋

安房神社の神池前には「安房あづち茶屋」がございます。

春は新緑鮮やかな神池後方の吾谷山^{あづち}を眺めながら、癒し処として心静かに穏やかなひとときを過ごされたいです。

炊きたての温かいおにぎりセットや、おみやげ物として房州銘菓、また夏の間は涼を呼ぶかき氷などもございます。是非お立ち寄り下さい。



社頭受付時間のご案内

※境内自由参拝について※

大晦日のみ終日参拝が可能ですが、それ以外については、**早朝六時～午後六時まで**となっております。警備・防犯上の都合により、時間外は境内への立入りを一切禁止しております。

営業日 **金、土、日、**
振替休日の月曜日

営業時間
午前十時～午後四時

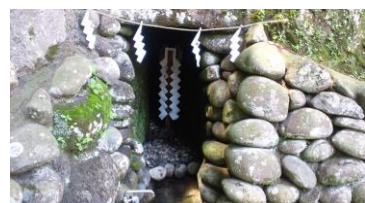
【お水取り・お砂取りの作法】

当社で「お水取り・お砂取り」をされる場合、まず初めにお祓いを受け、その後お水取場・お砂取場にお進み頂いております。

これは御本殿近くの清浄なお水取場・お砂取場に、外界の穢れを持ち込まないための重要な作法です。お時間に余裕を持って御来社されることをお勧め致します。また大型ポリタンクなどによる大量のお水取り、過度のお砂取りは御遠慮願ひ、御神水飲用の際には必ず煮沸いただきますようお願い致します。

※一般参拝者のお水取場・お砂取場への立入りは右記の理由から禁じております。また早朝、夜間のお水取り、お砂取りは一切出来ませんので、必ず受付時間内にて御取り願ひます。

- ・神符守札の授与、御朱印
 - ・御祈祷、お水取りの受付
- 午前八時三十分～午後五時**
午前九時～午後四時三十分



平成二十九年四月二十日発行／安房神社々務所
〒二九四・〇二三三 千葉県館山市大神宮五八九番地
電話 〇四七〇・二八・〇〇三四 FAX 〇四七〇・二八・〇四三八
HP <http://www.awajinjya.org/>